

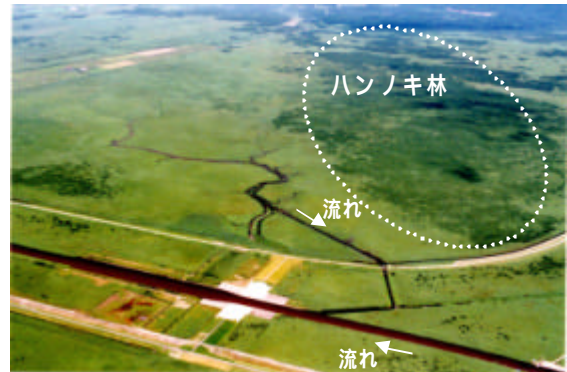
【湿原植生の制御】

河川環境の指標であるハンノキ林の急激な増加やヨシ スゲ群落の減少に対し、湿原植生を制御する対策をすべきである。

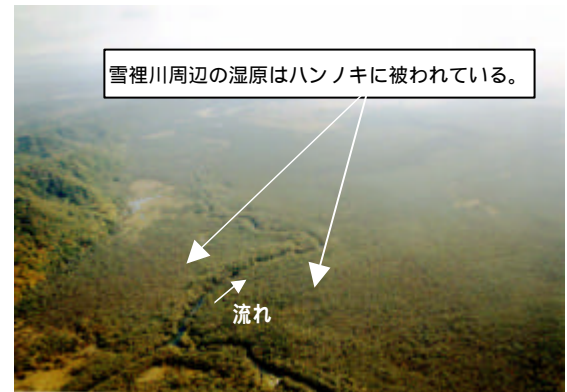
[具体的施策]

地下水位や冠水頻度を変化させることにより、また、土砂や栄養塩を防ぐことによって制御を図る。具体的には以下のとおりである。

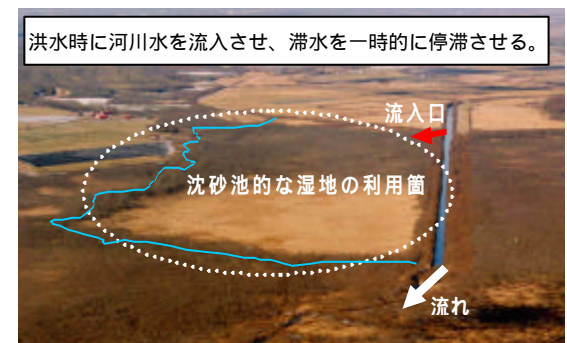
- ・ 雪裡樋門地区：湛水によって地下水位を上昇させ湿原植生への影響を把握する。平成 14 年度を目標に実験を終了し検証を行う。
- ・ 雪裡川地区：茅沼地区の実験結果を踏まえ、幌呂川の旧川復元を行い、雪裡川合流部における土砂氾濫を防止し、湿原植生の制御を図る。
- ・ 久著呂川地区：久著呂川の湿原流入部において、湿地の沈砂池的利用を行うことにより、下流域の湿原植生の制御を図る。当地区については早急に着手する。



施策イメージ図(雪裡樋門地区)



施策イメージ図 (雪裡川地区)



施策イメージ図

植生の制御を図るエリア

地区名	内 容	ハンノキ面積
雪裡川地区	旧河道復元による周辺植生の制御 小規模な堰上げ施設の湛水による植生の制御	650 ha
久著呂川地区	沈砂池的な湿地の利用による植生の制御	530 ha
雪裡樋門地区	湛水による植生の制御	270 ha



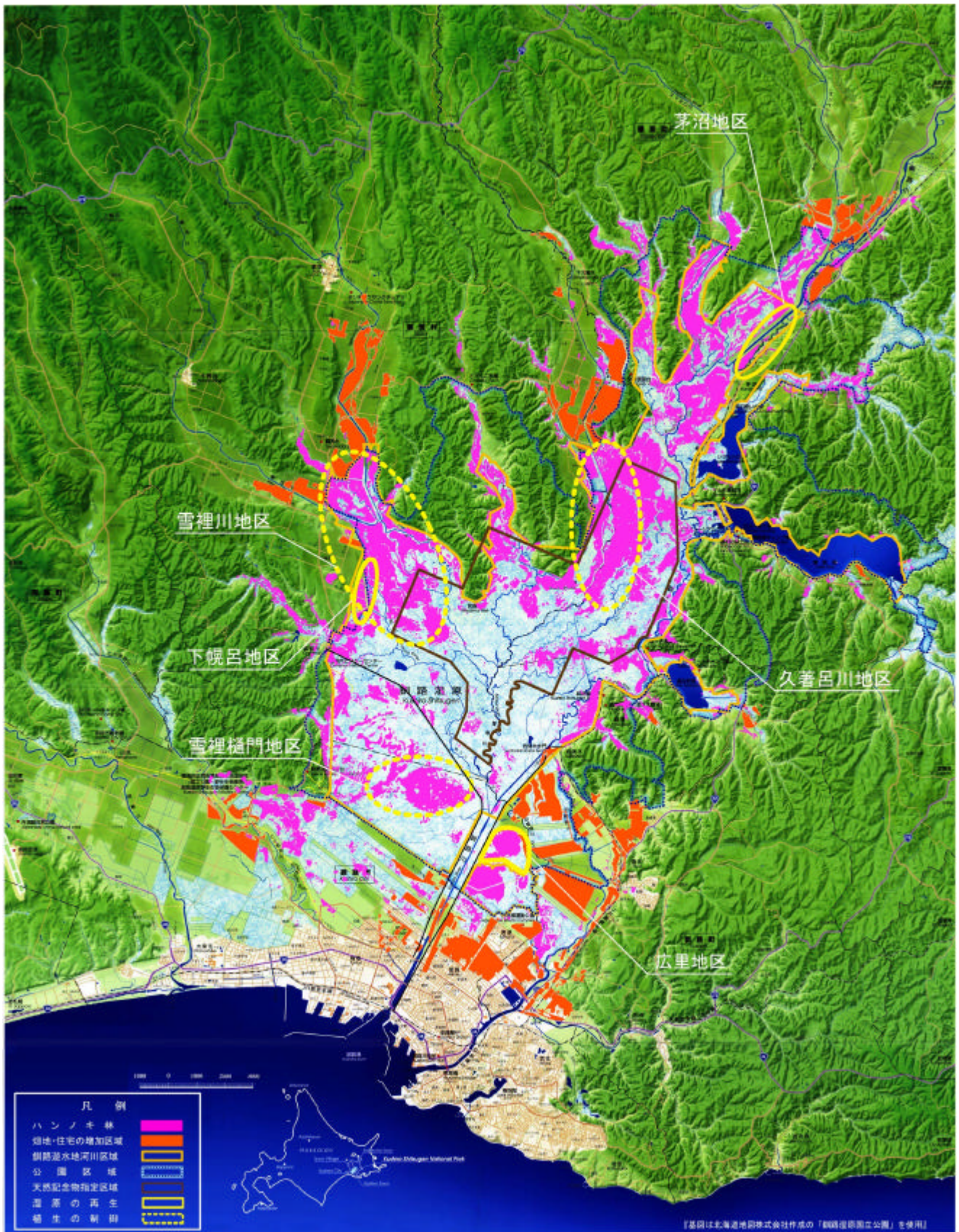


図 2-1 具体的施策箇所(湿原の再生、植生の制御)

## 2.2 釧路湿原における湿原再生事業の進め方

### (1) 当該地区の計画策定の視点

国土交通省、環境省では過去に失われた自然を積極的に取り戻すことを通じて生態系の健全性を回復することを目的とした自然再生事業を推進しており、釧路湿原の保全はこの代表的な事業として位置付けられている。

釧路湿原に関する自然再生事業のポイントを以下に示す。

#### 1) 流域の視点から計画を策定する。

釧路川流域を含めた釧路湿原の自然環境、社会環境を視野に入れた湿原再生計画を策定するために、以下の観点から取り組む。

- ・ 流域の経済活動と湿原保全の観点から湿原再生地域を選定する。
- ・ 本来の湿原形態を再生する視点で取り組む。
- ・ 湿原改変の過程とその要因を分析する。

#### 2) 順応的・段階的な事業の実施（アダプティブマネジメント）

自然再生事業は、事業実施による自然の反応（レスポンス）をモニタリングし、その状況に応じて計画内容にフィードバックしながら順応的に見直すとともに、段階的に事業を実施する（図 2-2）。

また、データに基づき、地域に即した事業内容を検討し、生態系を破壊しないように丁寧に実施する。

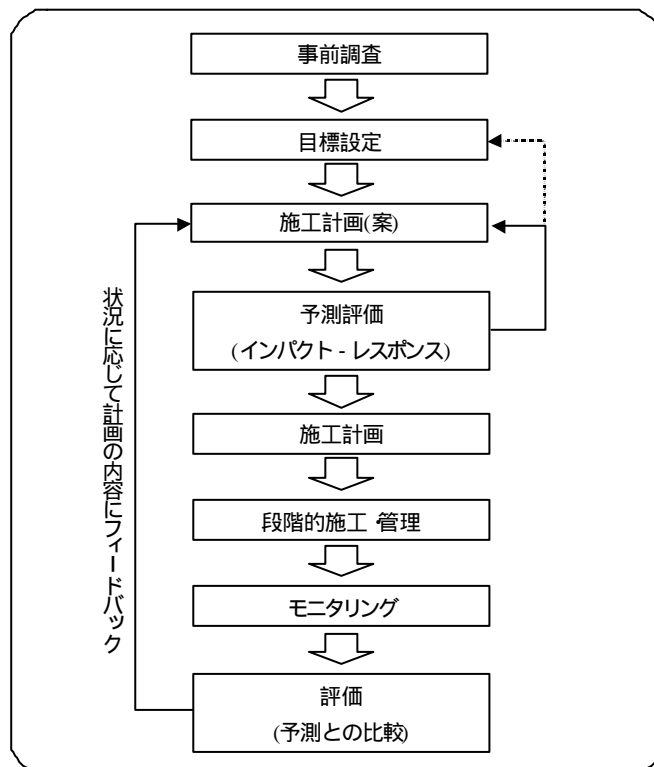


図 2-2 自然再生事業の実施フロー

3)各省、地元自治体、市民、NPO 等との連携

計画の策定段階・事業実施段階及び事業実施後の管理段階において、NPO や関係機関等との意見交換及び協働による積極的な連携を図る（図 2-3）。

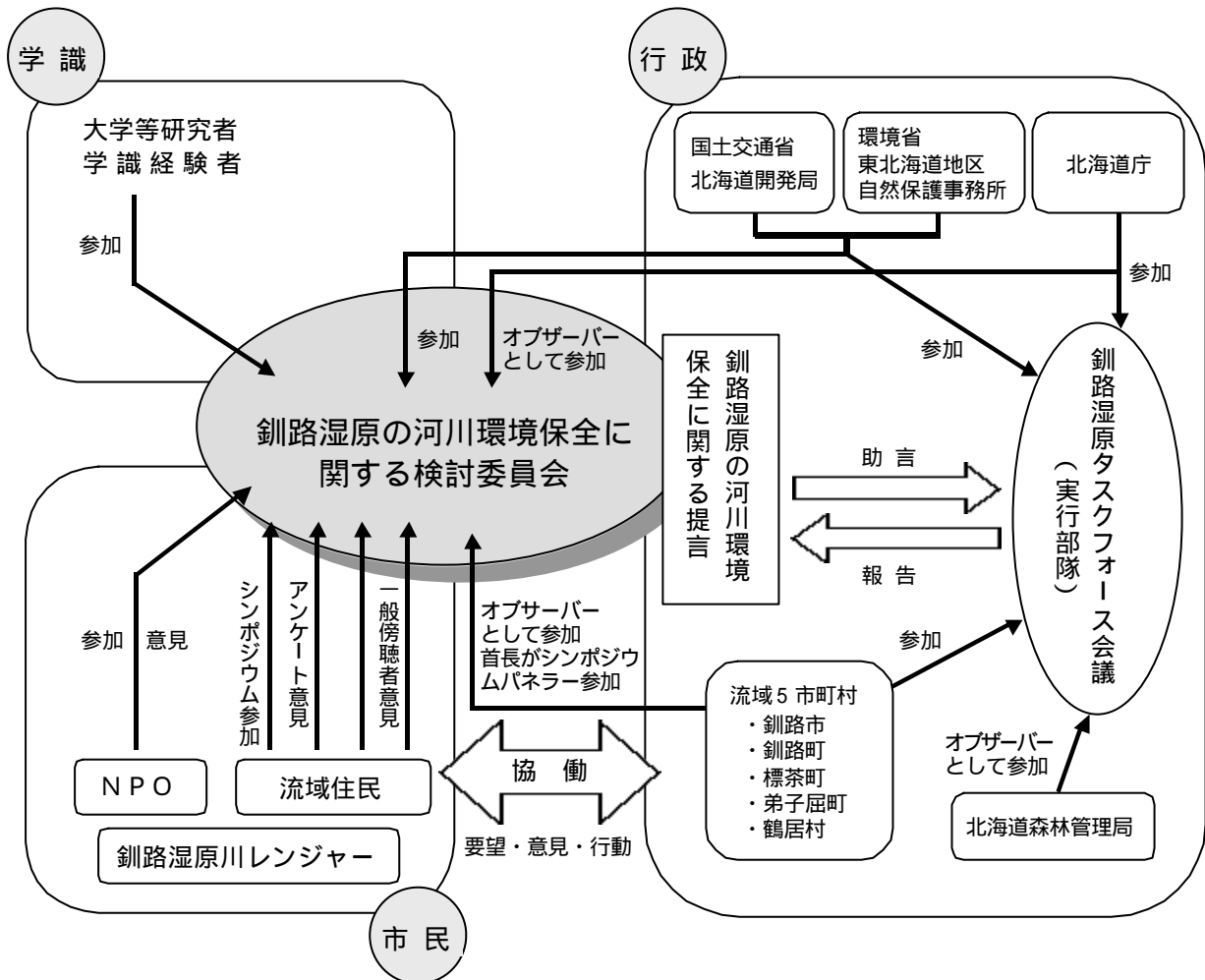


図 2-3 釧路湿原の河川環境保全に関するパートナーシップ図

4)情報公開

調査・事業の各段階で情報を広く公開し、地域合意の下で事業を展開する。また、これらのデータをもとに環境教育、普及啓発活動も積極的に行う。



### 3. 雪裡樋門湛水試験について

#### 3.1 湛水試験の目的

雪裡樋門湛水試験は、湿原植生を制御する対策として、地下水位を上昇させ湿原植生への影響を把握することを目的としている。

#### 3.2 平成13年度までの調査結果

平成13年度までの調査結果概略を表3-1に示す。

表3-1 平成13年度までの調査結果

年度	調査項目	得られた成果	課題
平成11年度	植物	動植物の生息・生育状況を把握した。	・湛水範囲域にハンノキ林が入らないので、湛水位を上げる必要が生じた。
	哺乳類		
	鳥類		
	魚類		
	昆虫類		
平成12年度 (9月より湛水開始)	ハンノキ	ハンノキは冠水状況でも耐性が非常に強いと推測された。よって、ハンノキに関してはその大部分には変化がないと予想される。	・単年度の調査であるため、生物相やその生理生態が変化した環境に必ずしも対応していない。したがって、経年的な観察が必要。 ・湛水施設が回遊魚の生息に影響を及ぼす可能性が示唆された。
	草本	CCAを行うに当たって環境要素のパラメーターが少なかったが、植生を特徴的なGroupに分割することができた。	
	哺乳類	2科5種のネズミの生息が確認された。	
	鳥類	12科26種の鳥類の生息が確認された。	
	魚類	6科12種の魚類、1科1種の甲殻類の生息が確認された。確認された魚類の内、ワカサギ、サクラマス、イトヨ、ヌマチチブは、樋門上流域に産卵遡上している可能性があった。	
	昆虫類	95科354種の昆虫類の生息が確認された。	
	地下水位、水温、地温、気象観測	地下水位は安原川沿いで低く、湿原内ほど高い傾向が確認できた。	
平成13年度 (湛水1年目)	ハンノキ(光合成、展葉パターン)	湛水によりハンノキは、年間の光合成生産物総量が減少した。ハンノキの制御をするのであれば、地下水位を上げることが効果的であることがわかった。	・今後、釧路湿原全域、あるいは着目した地域におけるハンノキ現存量を制御するためには、現在行っている実験により冠水水位とヤチハンノキ現存量の関係を明らかにする必要がある。 ・湛水施設には魚道を整備する必要がある。
	草本	湛水域の草本はツルスゲに推移することが予想された。	
	鳥類	湛水後には、水辺の鳥が新たに確認され、確認種数が増加した。	
	哺乳類	湛水前との大きな相違は見られなかった。	
	魚類	湛水域において生息が確認されなくなった種として、エゾウグイの他に回遊魚であるサクラマス、イトヨおよびヌマチチブがあげられた。	
	昆虫類	湛水前との大きな相違は見られなかった。	
	地下水位、水温、地温、気象観測	ハンノキ、草本類、魚類の物理環境の資料とした。	